

| | |
|-------------|---|
| Title | 黨錮と學問：とくに何休の場合 |
| Author(s) | 吉川, 忠夫 |
| Citation | 東洋史研究 (1976), 35(3): 414-446 |
| Issue Date | 1976-12-31 |
| URL | http://dx.doi.org/10.14989/153637 |
| Right | |
| Type | Journal Article |
| Textversion | publisher |

黨 錮 と 學 問

——とくに何休の場合——

吉 川 忠 夫

はじめに

一 後漢の太學

二 黨錮と太學

三 何休の立場と方法

四 何休と清流の思潮

結 び

は じ め に

清流の運動が中國の各地でたかまりをみせていた二世紀のなかばすぎ、後漢洛陽の太學生のあいだには、「文學將に興まさらんとす、處士復た用いられん」との期待の聲がおこったとつたえられる（『後漢書』申屠蟠傳、以下『後漢書』からの引用は『後漢書』を省く）。いうところの「文學」が、「文學は子游、子夏」といわれる場合の文學であること、つまり今日の學問を意味していることはうたがいが無い。周知のとおり、清流の運動は、清流士人中の急進分子が黨人の名のもとに官界から追放される黨錮事件に歸結したのであったが、いま「處士復用」のことはさておき、運動の挫折にもかかわらず、いなそれゆえにこそというべきか、「文學」は、太學生たちの期待にそむかず興起したというのである。かの疾風怒濤の時代に、清流士人、なかならず黨人たちによってかずかずの著述ののこされた事實が、そのことを有力にものがたつて

いる。黨禁が述作の内發的欲求を喚起した事例をみつけたことはきわめて容易である。

「黨事の起るに及んで、（應）奉は乃ち慨然として疾を以て自ら退く。屈原を追慙し、因って以て自ら傷み、感騷三十篇、數十萬言を著わす」、「荀爽……後ち黨錮に遭い、海上に隱れ、又た南のかた漢濱に通る。積むこと十餘年、著述を以て事と爲し、遂に碩儒たりと稱せらる」、「陳紀……黨錮に遭うに及び、發憤して書を著わすこと數萬言、號して陳子と曰う」、「張奐……禁錮せられて田里（敦煌酒泉）に歸る。……奐は門を閉ざして出でず、徒を養なうこと千人、尙書記難三十餘萬言を著わす」などなど『後漢書』のそれぞれの本傳にみえるほか、さらに趙岐や鄭玄の場合がある。趙岐の『孟子』注は、黨禁發生以前のことはあるけれども、宦官唐衡一派の迫害をさけ、北海の孫嵩の複壁中にかくまわれていたときに書かれたのであつたし、^⑥また鄭玄の營々たる經書注釋のいとなみは、黨禁とそれにつづく黃巾の戰亂、これらせまりくる事態のなかでの弟子たちとの緊張した關係、それらが動因となつてゐることは疑いがないように思われる。そして本稿がいささかちいたつて考察しようとする『春秋公羊經傳解詁』の著者、何休も、やはり黨禁に坐した一人物であつた。さて、いつの場合にも、期待のうらにはときの情況にたいする不滿がたくわえられてゐるとするならば、太學生たちをして「文學まさに興らんとす」と叫ばしめたのは、ほかならぬ學問の沈滯、とりわけ太學における學問の沈滯、こそがその原因であつたらう。太學生たちに學問沈滯の不滿をいだかしめたのは何故であつたか。そのことにこたえるためには、やはり後漢の太學のあらましについてかたておく必要がある。そのうえで『公羊解詁』をとりあげたい。太學における學問のありかた、あるいはまた何休が黨人であつたことをおもえば太學と清流運動のかかりあい、それらをぬきにして『公羊解詁』の成立をかたることはできないであらう。

一 後漢の太學

後漢王朝は前漢武帝以來の太學の制度、すなわち一經専門の五經博士をおき、博士のもとで一定の業を修めた博士弟子

——太學生——を考試のうえしかるべき官に任用する制度、を基本的に繼承した。後漢の太學は、王朝創業からまだ日もあさく、光武帝がなお兵馬倥傯の間にあつた建武五年（二九）、洛陽城の開陽門外、宮城を去ること八里の地に、長さ十丈、廣さ三丈の講堂をそなえて設けられたのをはじめとする（光武帝紀、および注引陸機洛陽記）。その建設には、「諸生、吏の子弟及び民、義を以て助作した」とつたえられるが（『東觀漢記』光武帝紀）、やがてしたいに規模をととのえ、明帝（五七—七五）のときには、匈奴の伊秩訾王大車且渠の入學に象徵されるように、おおいに活況を呈した（樊豐傳、儒林傳序）。しかるに創設から一世紀ちかくをけみした安帝（一〇六—一二五）の時代になると、太學は「學舍頽敝し、鞠として園蔬と爲り、牧兒蕘豎、其の下に薪刈するに至る」（儒林傳序）という荒廢したがたに一變する。それはまた太學における學問の荒廢のすがたでもあつた。「博士は席に倚りて講ぜず、朋友は相い視て怠散す」（同上）。

かかる學問の荒廢をまねいたそもその原因は、なによりも古文學を排除して近文學のみが教授されたこと、そのことが必然的に教課内容を固定化させ、學問の創造性を失わしめたことにあつたと考えておそらくあやまないであろう。學官にたてられたところの十四博士、すなわち易は施、孟、梁丘、京氏、尚書は歐陽、大小夏侯、詩は齊、魯、韓、禮は大戴、春秋は嚴、顏の十四博士は、いうまでもなくすべて「家法をもつて教授」される近文家であつた（儒林傳序）。もつとも光武帝のごく一時期、左傳が學官にたてられて論議をよんだことがあつた。古文學の興隆はいわば時代の要求であつたから、王朝としてもまったく無視するわけにはゆかなかつたのであろう。そのご章帝の建初八年（八三）にも、高才生を選抜のうえ、左氏、穀梁、古文尚書、毛詩を學ばしめよ、との詔がだされている（章帝紀、賈逵傳）。そして高第者を講師に擢んで近署に給事させたといわれるけれども、古文學が學官にたてられたわけではもとよりなかつた（儒林傳序）。王朝は近文學に固執した。しかも太學生があくまで家法を遵守すべき方針でのぞんだのである。たとえば、和帝の永元十四年（一〇三）に司空を拜命した徐防の上疏にはいう。

伏して見るに太學の博士弟子を試するや、皆な意を以て説き、家法を修めざるも、私かに相い容隱し、姦路を開生す。

策試有る毎に輒ち諍訟を興し、論議は紛錯し、互いに相い是非す。……今ま章句に依らずに妄りに穿鑿を生じ、師に遵うを以て義に非ずと爲し、意もて説くを理を得たりと爲す。道術を輕侮して浸やく以て俗と成る。誠に詔書實選の本意には非ず。……臣以爲らく、博士及び甲乙の策試は、宜しく其の家の章句に従がうべし。五十難を開きて以てこれを試し、解釋多き者を上第と爲し、引文明らかなる者を高説と爲さん。若し先師に依らず、義相い伐めることあれば、皆な正して以て非と爲さん（徐防傳）。

徐防の右の意見はそのまま採擇されたという。學官にたてられるのが排他的に近文家のみであり、しかもその學風として家法ないし師法の遵守が要請されるとき、「意説」の語から感得されなくてはならない批判的精神にねざす創造性の芽はつみとられ、おのずから無爲、安逸、惰性といったたぐいのものがひろく支配することとなるであらう。「博士は席に倚りて講ぜず、朋友は相い視て怠散す」というのこそ、そのゆきつくところの情景であつたろう。儒林傳序にみえる右の言葉は、尙書令樊準の上疏の一節、「今ま學者は益す少なく、遠方は尤も甚し。博士は席に倚りて講ぜず、儒者は競いて浮麗を論ず」に由來するが、樊準の上疏が行なわれたのは鄧太后臨朝の時代、といえは元興元年（一〇五）の和帝の死から安帝の永寧二年（一二二）の太后の死にいたるまでの間のことである。

太學の沈滞をいかにして打開すべきか。そのために王朝が行なつたのは、學舎の新營とそれにとまなう若干の制度改革であつた。それは將作大匠翟輔のつぎの意見にもとづく。「光武の初めて興るや、其の荒廢を愍れみたまひ、太學の博士舍、内外の講堂を起つ。諸生は卷を横たえ、海内の集う所と爲る。明帝の時、辟雍始めて成り、太學を毀たんと欲るも、太尉の趙熹以爲らく、太學と辟雍と皆な宜しく兼ね存すべし」と。故に並びに傳えて今に至る。しかるに頃ごろ頽廢し、園採芻牧の處と爲るに至る。宜しく更に修繕し、後學を誘進すべし」（翟輔傳）。かくして順帝の永建六年（一二二）九月に着工、翌陽嘉元年（一二三）八月に完工（順帝紀）、參加した勞働者、「用作工匠」は十一萬二千人（『水經注』卷一六穀水條）、新營なつたのは二百四十房、千八百五十室（儒林傳序）であつた。完工を記念に實施された明經試では、下第者をも博士

弟子に補し、また甲乙科員各十人をました（順帝紀）。ただし前漢末の平帝のとき、「歳ごとに甲科四十人を課して郎中と爲し、乙科二十人を太子舍人と爲し、丙科四十人を文學掌故に補すと云う」（『漢書』儒林傳序）とあるところの甲乙科であり、博士弟子の官僚任用のわくをひろげたわけである。さらに尙書令左雄は、「海内の名儒を徴して博士と爲し、公卿の子弟をして諸生と爲さしめ、志操ある者は其の俸祿を加えん」と奏言し、あるいは汝南の謝廉、河南の趙建いづれも十二歳になったばかりなのを、よく一經に通ずるをもつて童子郎を拜命せしめるなどしたため、「書を負つて來學するもの、京師に雲集」するにいたった（左雄傳）。ついで質帝の本初元年（一四六）にも、郡國の推學をうけた五十歳以上、七十歳以下の明經者を太學に學ばしめたほか、大將軍から六百石にいたるものの子弟に業を受けさせ、歳滿つれば課試のうえ高第者五人を郎中に、次席五人を太子舍人に補任した（質帝紀）。かくして太學への遊學者は急増し、二世紀の中葉には、實に三萬餘人というおどろくべき數字に達したのである（儒林傳序）。

しかしその數字は、太學における學問の活況を意味するものではない。「是れより遊學するもの増盛し、三萬餘生に至るも、然れども章句は漸やく疏にして多く浮華を以て相い尙び、儒者の風は蓋し衰えたり」（儒林傳序）。施設の擴張と自發性にもとづかざるなかば強制的な入學勸奨、それに人氣とりともいふべきいくつかの政策によって、太學生はたしかに急増した。だが教課内容にはなんら手をくわえられるところがなかった。しかもいわゆる章句の學、それをもし傳統とよぶことができるなら、その傳統すら「疏」と表現されるように、すっかりすり替わったものになってしまっていたのである。そればかりではない。太學生の急増というまさしくその事實によって、太學はまたあらたな問題をかかえてまねばならなくなつた。

三萬餘人の太學生は、王朝の官僚となる志望をもつて集つてきたものである。「祿利の路」がしからしめたものである。なによりも太學は官僚養成機關であり、太學生は官僚豫備軍であつた。逸民にいわたしむれば、太學もまた一個の「帝王の庭」であつた（『後漢紀』卷二「夏馥」）。もし太學生が眞の學問研究、そののみをめざしたのであつたなら、全国各地にはか

これらの要求にこたえるべき多數の私塾が存在していた。博士に徴されながら就かなかった山陽瑕丘の檀敷のごとき、「精舎を立てて教授し、遠方より至る者、常に數百人」とつたえられる（黨錮檀敷傳）。そこには太學にくらべてより自由な學風が存したのである。そして近文學だけにとどまらず、古文學を講ずる私塾ももちろん存在した。たとえば、古文尙書を習った陳留東昏の楊倫は、大澤中に講授し、弟子は千餘人にのぼった（儒林楊倫傳）。ところで、王朝の官僚たらんとして雲集した太學生たちは、しかしそのうちの幾人が首尾よく目的を達しえたであろうか。甲乙科の策試のわくを十人づつひろげたところで、三萬餘人の要求をかなえることはとてもおぼつかなかったであろう。しかも、いわゆる濁流の正路にやらざる官界への進出はしだいに顯著となり、そのことがいつそう時代閉塞的な情況をもたらしていた。たとい策試を上第の甲科で通過して郎中に採用されたとしても、そのころ三署には、七百餘人とも二千人ともいわれる郎官がさだまった職務もなくだぶついていたのであった。太學生たちが清流の運動に呼應して、「文學まさに興らんとす」と叫ぶとともに、「處士また用いられん」と叫んだのは、かかる背景にねざしていた。清流の運動が濁流勢力による選舉制の破壊にひとつの攻撃の照準をあわしていたことはうたがいが無い。はやく陽嘉二年（二三三）の李固の對策には、中常侍、すなわち宦官の子弟の出仕に制限をくわえるべきことをつぎのように主張している。「詔書もて侍中・尙書・中臣（中朝の臣）の子弟の吏と爲り孝廉に察せらるるを得ずと禁ずる所以の者は、其の威權を乗り、請託を容るるを以ての故なり。しかるに中常侍は日月の側に在つて勢聲は天下に振い、子弟の祿任、曾つて限極なし。外は謙默に託し、州郡を干さずと雖も、諂僞の徒は風を望んで進擧す。今ま爲に常禁を設け、これを中臣に同じくす可し」（李固傳）。また桓帝のときの尙書朱穆の上疏にはいう。「漢の故事を案ずるに、中常侍には士人を參選す。建武（二五—五五）以後、乃ち悉く宦者を用い、延平（二〇六）より以來、浸やく益す貴盛なり。……權は海内を傾け、寵貴は極まりなく、子弟親戚は並びに榮任を荷う。故に汎濫驕溢して能く禁禦するなし。凶狡無行の徒は媚びて以て官を求め、恃勢怙寵の輩は百姓を漁食し、天下を窮破し、小人を空竭せしむ」（朱穆傳）。たとえばこの朱穆の上疏にあい前後する延熹二年（二五九）、外戚梁氏一掃の功によって侯爵を授

かり、梁氏五侯にかわる五侯とよばれた單超、徐璜、具瑗、左悺、唐衡たち五人の宦官であり、單超の弟單安は河東太守、弟の子單匡は濟陰太守、徐璜の弟徐盛は河内太守、兄の子徐宣は下邳令、左悺の弟左敏は陳留太守、具瑗の兄具恭は沛相、といったごとく宦官子弟の地方官就任がめだっている（宦者傳）。それだけではない。宦官にとりいる官僚もあれば、その賓客となつて獵官運動に血道をあげるものもある。建康元年（一四四）、賢良方正能直言極諫科に擧げられた皇甫規の對策に、「公卿以下、佐吏に至るまで、其（中常侍、小黃門）の門に交私し、終に紀極なし。頑凶の子弟は州郡に布列し、並びに豺狼と爲つて群生を暴虐す」（『後漢紀』卷一九）とのべられ、また時代は靈帝のときにくだるが、郎中の審忠は「州郡の牧守、風旨を承順し、辟召選舉には賢を釋て愚を取る」（宦者曹節傳）とのべている。かく、いわゆる清流は、選舉制も辟召制も、濁流の壓力によつて危殆に瀕しているとの危機感をつよめたのであつた。そして危機感は太學生たちによつても共有されたのであつた。

桓帝時代（一四六—一六七）の太學はすでに清流勢力の一大據點となつていた。永興元年（一五三）、刺史として冀州の監察にでむいた朱穆が宦者趙忠の一族を彈壓したため、輸作左校の罪に問われると、劉陶をはじめとする太學生數千人は宮闕におしかけ、自分たちが身がわりにならうと強硬な上書をおこなつて、朱穆の釋放に成功した（朱穆傳）。延熹五年（一六二）には、徐璜、左悺たちからの賄賂の要求をはねつけた議郎皇甫規がやはり輸作左校に處せられたとき、諸公および太學生張鳳たち三百餘人が抗議の行動をおこしている（皇甫規傳）。「東漢の太學三萬人、危言深論して豪強を隱さず、公卿は其の貶議を避く」（『明夷待訪錄』學校）といわれる所以である。當時の太學生のなかでとりわけ名聲がたかかったのは、陳留の符融、太原の郭泰、潁川の賈彪、南陽の何顒たちであり、かれらは清流勢力の巨頭たる司隸校尉李膺、太尉陳蕃、尙書王暢たちと親密な交りをむすんだ。なかでも郭泰のごときは、清流のあいだでつくられた天下の名士番付、三君、八俊、八顧、八及、八厨のうち、八顧の筆頭にかぞえられさえている（黨錮傳序）。

太學内のこのような沸騰した状況をよくつたえているのは、『後漢書』循吏仇覽傳であろう。仇覽、一の名は香。陳留

考城の人。齡すでに四十をこして考城縣の主簿であつたとき、縣令の王渙から人物をみこまれた仇覽は、「今日の太學は長裾を曳き、名譽を飛ばす。皆な主簿の後のみ。一月の奉を以て資と爲す。勉めて景行を卒えよ」とはげましをうけて太學へ遊學する。そしてそこで同郡の符融と部屋を隣りあわすこととなつた。高名の符融のところにはいつも部屋にあふれんばかりの賓客があつまつてくるが、仇覽は言葉をかわそうともしない。そのような仇覽に符融はかえつて心をひかれ、一日こうかたりかける。「先生と郡壤を同じくし、房牖を隣りにす。今ま京師には英雄四集し、志士交結の秋なり。經學に務むと雖も、これを守ること何ぞ固ならんや」。だが仇覽は、「天子の太學を修設したまいしは、豈に但だ人をして其の中に游談せしむるのみならんや」といいのこしてたちさる。符融はこのことを郭泰にかたり、二人はあらためて仇覽の房をおとずれたうえ、わざわざ一宿せんことをこうたというのである。

右の話は、當時の太學が全國からあつまつた「志士」たちがたがいに交りをむすび、また談論をたたかわすところであり、仇覽のごとく「經學」に専心するものはかえつて「固」と白眼視されかねない環境であつたことをまざまざとつたえている。もちろん濁流批判が談論のおもな内容であつたろう。「文學まさに興らんとす、處士また用いられん」と叫ばれたのも、おそらくそうした情況のもとにおいてであつたろう。それは申屠蟠傳のつぎのごとき文脈のなかにおかれている。「是より先、京師の游士たる汝南の范滂等、朝政を非訐し、公卿より以下、皆な節を折つてこれに下る。太學生は爭つて其の風を慕い、以爲らく文學まさに興らんとす、處士また用いられん、と」。

二 黨錮と太學

では文學は興起したか。處士は用いられたか。熱病にとりつかれたような太學あげての興奮を戰國の處士横議の風になぞらえた申屠蟠は、不幸な結末を豫想して太學をさつた。その二年後、すなわち延熹九年（一六六）に黨錮事件は發生する。李膺をはじめとする清流派の急進分子二百餘名が禁錮の刑に處せられたが、濁流が李膺たちを告發した上書にはつぎ

のごとくある。「太學の遊士を養ない、諸郡の生徒と交結し、更こもども相い驅馳して共に部黨を爲し、朝廷を誹訕し、風俗を疑亂せり」(黨錮傳序)。太學生を乾分のごとくに養なつた事實がまず第一に糾彈されているのが注目されよう。また「諸郡の生徒」とは、太學を小規模にした各郡國の學校の生徒や、またたとえば李膺と姻戚の關係にあった潁川長社の鍾皓が密山に經營した私塾の生徒のごときをさすのであらう(鍾皓傳^⑧)。ともかく黨錮が発生すると、賈彪が外戚の城門校尉竇武や尙書の霍諝らにはたらきかけた結果、永康元年(一六七)六月にいたつて、黨人は洛陽の諸獄から釋放された。しかし終身禁錮の刑にはかわりなく、名籍は三公府にとどめられたままであつた。同年十二月に桓帝が崩じて靈帝が立ち、竇武の女である竇太后が臨朝すると、清流勢力に同情的な竇武の影響力のもとに黨人の官界復歸があいついだ、それもつかのま、竇太后をかつぐ宦官とのあいだの對立は、ついに建寧元年(一六八)九月の武闘にまで發展する。結果は竇武側の決定的な敗北であり、翌二年(一六九)十月には第二次黨錮がおこつてゐる。第二次黨錮は第一次黨錮よりいっそう熾烈をきわめた。獄死したものは百餘名、「妻子は邊に徙され、諸の附從者、錮は五屬にまで及び」、死徒廢禁されたものは六、七百名。その結果、かえつて「天下の豪傑及び儒學行義の者、一切結んで黨人と爲る」とつたえられる。黨禁が完全に解かれるのは、實に黃巾軍が蜂起した中平元年(一八四)、黨人と黃巾との合謀をおそれてのことであつた(靈帝紀、黨錮傳序)。かく王朝が日一日と混迷をふかめてゆく事態のなかで、「處士復用」の期待が現實のものとなる條件はもはや存しなかつたであらう。中平五年(一八五)、處士の荀爽、鄭玄、韓融、申屠蟠たち十四人を博士に補せんと詔が下るが、一人としてうけるものもなかつたのは印象的である(申屠蟠傳、および『後漢紀』卷二五)。だが「文學まさに興らんとす」との期待は、あだ花にはおわらなかつた。

たしかに、清流運動にふかくコミットした太學には、黨錮をさかいとして頽廢と寂寥がおとずれたごとくである。「黨人既に誅せられ、其の高名の善士は多く流廢に坐し、後ち遂に忿争して更こもども相い言告するに至る」(儒林傳序)。太學生同士の告發がどのようなかたちで行なわれたのか、そのことは知るよしもないが、かつての太學の名士であつた何顒のごと

きは、黨人の名籍にリストアップされると、姓名をかたつて汝南への亡命をはかっている（黨錮何顒傳、および『魏志』荀攸傳注引張璠漢紀）。また熹平元年（一七二）には、竇太后が崩ずると、何者かが「天下大亂す。曹節、王甫は太后を幽殺し、常侍の侯覽は多く黨人を殺す。公卿は皆な祿を尸^{ねず}み、忠言する者ある無し」と朱雀闕に書したため、宦官政府にたいする讒謗と、徹底的な搜索が行なわれ、その結果、太學諸生數千名が捕繫された（靈帝紀、宦者曹節傳）。曹節、王甫、侯覽いづれも時に權力をふるつた宦官であつた。獻帝の初平四年（一九三）、四十餘名の儒生を課試のうえ、いったんは上第者を郎中に、中第者を太子舍人に任じ、下第者は罷黜するときめながら、あらためてつぎの詔が下されているのはまことに印象ぶかい。「孔子は學の講ぜざるを歎く。講ぜざれば則ち識る所日々に忘る。今ま者儒は年六十を踰えて本土を去離し、糧資を營求して業を専らにするを得ず。結童にして學に入り、白首にして空しく歸り、長^とわに農野に委^すてられ、永えに榮望を絶つ。朕甚だこれを慤れむ。其れ科に依つて罷する者（下第者）をも太子舍人と爲さんことを聽^{ゆる}さん」（獻帝紀）。課試に應ずるものが四十餘名にしか達しないとは太學生の激減をおもわせるし、しかもかれらは故郷を離れて日々の生活にも窮々たるありさまであつたのである。

このように太學には頽廢と寂寥がおとずれた。にもかかわらず、いなそれゆえにこそ「文學」は興起した。あえて逆接的表現を用いるのはゆえなことではない。その事實は、まず地方の私塾の以前にもまさる活況に示されている。太學生たちはもはや洛陽へのみれんをすてて全國に散り、祿利のためならざる學問が地方に着實にねづきはじめてのであつた。その育成にあたつたのはときとして地方に割據した群雄であつたけれども、^⑧ おおむねは清流士人あるいは黨人、^⑨ ないしはもとの太學生たちの經營にかかる私塾であつた。故郷の太原界休にひきあげた郭泰のごときも、數千人をかぞえる弟子を教授したといわれるし（郭泰傳）、僻遠の地、たとえば廣漢綿竹においても太學に學んだ董扶や任安によつて私塾がひらかれた。^⑩ 太學生はいまや有力な文化傳播者となつたのである。

『三國志』魏志邴原傳注引の「邴原別傳」は、眞の師をもとめ、萬里の道を笈を負つて遊學にでかけた當時の青年の興

奮をつたえてくれるであろう。わかくして地方遊學を志した北海朱盧の邴原是、同郡安丘の孫崧、というのは趙岐をかくまった孫嵩なのだが、その孫崧をおとずれて、つぎのようにたずねられる。「君の郷里の鄭君、君これを知るや」。鄭君とは北海高密の鄭玄のことである。孫嵩の質問に邴原は「然り」とこたえたうえ、つぎの問答がはじまる。崧「鄭君は學、古今を覽、博聞彊識、鉤深致遠にして、誠に學者の師模なり。君は乃ちこれを捨て、厖を千里に蹠く。所謂る鄭を以て東家丘と爲す者なり。君は知らざるに似たるに、しかも然りと曰うは何ぞや」。原「先生の說、良に苦樂良鍼と謂う可し。然れども猶お未だ僕の微趣に達せざるなり。人には各の志あり、規う所は同じからず。故に乃ち山に登りて玉を採る者あり、海に入りて珠を採る者あり。豈に山に登る者は海の深きを知らず、海に入る者は山の高きを知らずと謂う可けんや。君は僕の鄭を以て東家丘と爲すと謂う、君は僕を以て西家の愚夫と爲すか」。かくして孫崧はわが非をわび、なお堯豫の士人には知己が多いからと紹介狀をあたえるが、邴原はそれを家にのこしたまま、同郷の管寧および平原高唐の華歆とつれだって遊學の途にのぼった。孫崧の紹介狀をたずさえなかったのは、學問が「交遊の介を待ちて成るが若きものに非ず」と考えたからであつた。汝南の名門の生れである袁弘も、おのが貴勢の身もとをかくすため「姓名を變じて」師の門をたたいたといわれるが（袁閔傳附）、それとおなじく、弟子と師との緊張した關係には社會的外被はかえって邪魔ものではなかつたのである。このようにして邴原は、陳留では韓子助（卓）を師とし、潁川では陳仲弓（寔）を宗とし、汝南では范滂（滂）と交わり、涿郡では盧子幹（植）に親しんだのであつた。

數百人、數千人をもつて形成される私塾では、その秩序を維持する必要からおもに修業の深淺にもとづく一定の階層制が採用されたであろう。また讀書だけではなく生産勞働も塾生の重要な日課のひとつであつたろう。後漢末のきびしい社會環境のもとでは、學團はその存立のためにさまざまの外壓とたたかわねばならず、ときには解散においこまれるはめにもたचितつた。このように當時の私塾は讀書と勞働とが一體化した生活集團であり、それゆえにそれ自體でひとつの聚落を形成する場合もめずらしくはなかつたであろうと想像される。ともかく、邴原の同時代人であり、たがいに面識もあつ

た北海營陵の人、王脩の懇篤なる「誠子書」は、遠方へ遊學にかけた子弟にあたえられたものとして讀むことができるのではないか。かれ自身、二十歳のときに南陽へ遊學した經歷を有している（『魏志』王脩傳）。

おまえたちが出かけていってしまつてから、しまつたことをしたと憂鬱です。なぜかといえば、私はほんとに老人なのです。たのみとするのはおまえたちだけなのです。それがみんな目のまえからいなくなつて、氣もそぞろです。人間の一生はたちまちのうちに経過してしまい、日月はいとおしい。だから禹王は尺璧をおしまずに寸陰をおしんだのです。時はすぎればとりかえしがつかない。年をとれば若くなれないのとおなじです。おまえに一刻もはやくものにしてもらいたい。なにも讀書だけがすべてではありません。あわせて人間形成を學びなさい。おまえはいま郡縣をわたり、山河を越え、兄弟と離れ、ここから遠ざかつていますが、それというのも舉動がどうあるべきかを目にし、高邁な人物のめでき志操を觀察し、一を聞いて三を得るといふふうになつてもらいたいからです。りっぱな人間になることをめざしなさい。身のまわりのものにはくれぐれも氣をつけないといけない。よくも悪くもなるポイントはこの點にこそあるのです。人とのつきあひは、せいぜいゆとりあるように。熟慮のうえ言葉をはき、慎重に検討のうえ行動をおこしなさい。いずれの場合にもまことの心をもち、道理にたがえばもうだめです。父たるもの、子どもがりっぱになつてくれとねがい、わが身を殺すことだけはできないが、そのほかのことはなにも惜しみはしません。そしてまた私塾の繁榮にくわえて、黨錮に歸結した清流運動の挫折、まさしくそのなかから「文學」が興起したことは、はじめに示したごとく黨人によつて多くの著述がのこされた事實がものがたつてゐるが、ここではとくに何休をとりあげて考察をくわえることとしたい。何休の『公羊解詁』は、「文學まさに興らんとす」との期待にどのようにこたへてゐるか。また清流運動のなかに展開された思潮がどのように反映されてゐるであろうか。

三 何休の立場と方法

『後漢書』儒林傳がつたえる何休、字は劭公の事蹟は、われわれを満足させてくれるほど十分にあきらかではない。光和五年（一八二）に五十四歳をもって卒したといえ、生年は永建四年（一二九）、鄭玄より二年おそく生れ、一八年はやく死んだ。任城樊（山東滋陽）の人である。一時期、清流の一巨頭たる太傅陳蕃の辟召をうけたけれども、建寧元年（一六八）、陳蕃が政争に敗れると、かれも黨禁に坐した。かれの黨禁が解かれるのは光和二年（一七九）のことであって、『公羊解詁』は公務を停止されたこの間に成った。

ことわるまでもなく公羊學は、官學たる近文學、そのなかでもことに大宗の地位にたつものであった。何休の立場は『左氏膏肓』『穀梁廢疾』とあわせての三部作、『公羊墨守』の書名によくあらわされている。「其の師博士羊弼とともに李育の意を追述して以て二傳を難じ、公羊墨守、左氏膏肓、穀梁廢疾を作る」（本傳）。そしてこの三部作をもってわが陣だてをととのえおえた何休は、『公羊解詁』の執筆に着手した。文字どおり、何休は公羊を墨守した。それだけではない。かれが漢代經學の潮流のただなかに棹さしていることは、『解詁』中に頻繁に緯書が引かれ、あるいはまた蘇興をして「何氏の傳に注するや喜んで災異を言う。家法に本づくとも雖も傳會の議す可き者多し」といわしめているほど、天人相與の災異説をきわめて熱心に説く事實をもって證しうるであらう。かくして、何休をひとまず傳統主義者と名づけることはあやまりではないと思われる。しかし、かれはたんなる守舊的な傳統主義者であつたのではなかつた。もし『解詁』が家法、師法を記録にとどめるだけのものではあつたのなら、かれもその一人であつた清流、その清流にたいする太學生たちの「文學まさに興らんとす」との期待にいかにしてこたえられようか。かれがなぜ『解詁』を書いたのか、書かねばならなかつたのか、つまりかれの基本的態度がいずこに存したのかを、徐疏を参考にしながら、『解詁』の序についてあらかじめ確認しておきたい。何休と太學とのかわりはまったく不分明なのだが、やはりそこには太學で講ぜられていた嚴、顏二家の春秋學と對立的な立場が表明されているのを看取しうるであらう。

孔子の言に、「吾が志は春秋に在り、行いは孝經に在り」（『孝經鉤命決』）とあるとおり、春秋と孝經こそは「聖人の極

致」であり、「治世の要務」である。さて春秋を傳えたものは一家にとどまらず、また亂世の史をもとにして作られたものであるから、そのなかには「非常の異義、怪しむ可きの論」が多くふくまれている。そのため「説者」たち、というのは徐疏によれば「胡毋子都、董仲舒の後なる莊（嚴）彭祖、顔安樂の徒」であり、つまり學官にたてられた嚴、顔二家にはかならないのだが、かれらはそれらにたいして疑惑をいだき、ここから「倍（背）經」、「任意」、「反傳違戾」のあやまりが生ずることとなる。

たとえば成公二年、鞏の戰で、齊の頃公は魯、晉、衛、曹四國の軍にとりかこまれる。そのとき頃公の車右であつた逢丑父なるもの、面目も衣服も頃公とあい似るのが、人君のしめるべき車の左をしめてすっかり頃公になりすまし、首尾よく頃公を逃れさせたうえ自分は斬られる。さてこれについての解釋をとりあげた徐疏は、「春秋は非（ぜ）らざるに説者はこれを非る。是れ背經なり」といゆる倍經の例とし、成公二年の疏においても、「公羊説、解疑論、皆な丑父を譏る者は何氏の意に非ず」と指摘する。しかれば、公羊説や戴宏の「解疑論」を倍經と考える何休の解釋はどうであるのか。經文は「六月癸酉、季孫行父・臧孫許・叔孫僑如・公孫嬰齊帥師、會晉郤克・衛孫良夫・曹公子手、及齊侯戰于鞏、齊師敗績」、「秋七月、齊侯使國佐如師、己酉、及國佐盟于哀婁」であつて、逢丑父をとりたてて「賢」とする辭を用いないが、それはなにも丑父を譏つてのことではない。「當に絶つべき」はあくまで恥辱をこうむりながら難に死ななかつた齊の頃公なのだ。「如し丑父を賢とすれば、是れ人の臣を賞し、其の君を絶つなり。若し丑父の故を以て頃公を絶たざれば、是れ諸侯の戰いて難に死する能わざるを開くなり」。丑父が權道をもつて頃公を免れしめた行爲はおのずから齊が善しとすればよい問題であつて、王法を示す春秋では貴ばないのだ、というのが何休の解釋であつた。

「任意」とは、たとえば所見、所聞、所傳聞のいゆる三世の區分にかんして、顔安樂が襄公二十一年の孔子誕生後を所見の世とすること、つまり襄公を所聞の世と所見の世に兩屬させるたぐいだという。何休は春秋緯『演孔圖』にもとづいて、昭定哀を所見、文宣成襄を所聞、隱桓莊閔僖を所傳聞の世とする（隱公元年注）。

さらに徐疏が「反傳違戾」の例としてあげるのは、宣公十七年「六月癸卯、日有食之」と、日のみいつて朔をいわないのを、顔安樂が十四日に日食があったと解釋することである。しかしながら隱公三年の傳例、「曰某月某日朔日有食之者、食正朔也、其或日、或不日、或失之前、或失之後、失之前者、朔在前也、失之後者、朔在後也」にてらすならば、ここはまさしく日のみをいうのだから、「失之前者、朔在前也」の事例にあたり、二日に日食があったと解すべきなのである。

かくして嚴、顔二家の說者たちは「外文」を博引して自説をとりつくり、「師言——胡董之前、公羊氏之屬——」を講誦すること百萬言におよびながらもなお解釋のつかないことすらある。ときには責讓嘲笑の辭をくわえ、あるいは他經を援引して句讀を失し、無をもつて有とするなど、閔笑すべきことがらはかぞえきれない。このため古文學者から「俗儒」とのあざけりをうけた。そしてついに賈逵によってその學問的衰弱をつかれ、「公羊奪う可し、左氏興る可し」と筆端を揮わせることとなった。『後漢書』によって補えば、建初六年（七六）のこと、賈逵が左傳の理の公羊にまさることを摘んだ「長義」を著わし、それを嘉した章帝から布および衣の下賜があったうえ、賈逵に選拔させた「公羊嚴顔の諸生の高才者」二十名に左傳を教授させることとなった事實をさす。この屈辱的な事態にもかかわらず、公羊の先師たちはあいての理と辭の曲直をみきわめのうえ決着をつけることができず、「二創」、というのは「倍經」「任意」「反傳違戾」のあやまり、および「他經を援引して其の句讀を失う」あやまり、にあいかわらずひきずられるままであった。だが、と何休はいう、これは「世の餘事」である。公羊の文を執持固守して左傳を論じ、敗績失據したものではあるまいか。余はひそかにこのことを悲しみつけてきた、云々。

何休の胸臆には、左氏學派からしかけられた攻撃をまともにうけとめえなかった先師たちのふがいなさ、そのことにたいする悲嘆の情がたくわえられていたのである。それゆえに『解詁』は、何休の自負と使命感にもにた感情の表現であった。「世之餘事」を徐疏は、「先師の解義、是ならずと曰うと雖も、但そ己の在る有れば公羊は必らず存せんことを言う。故に此れ世の餘事なりと曰う。餘は末なり、云々」とバラフレイズしている。では春秋の大義はいかにして存せられるべ

きなのか。すでに序に言明されているように、ひとつは嚴、顔二家末流たちの『二創』の弊、それこそ太學の沈滯をもたらししていたところの弊でもあったと思われるのだが、それらを排して胡毋子都、董仲舒たちのたゞしい傳統に回歸すること、ふたつは他經の義、ことに左氏の義をたゞしく理解すること。ふたつの立場は密接に關連しあっており、他經の義に通ずることによって傳統のなかみをゆたかに育み、二創の弊におちいらざるようにとの配慮なのである。つまりたゞしい傳統に回歸しつつ、しかも倍經任意、反傳違戾ならざる創造的な新義を樹立しようというのである。これこそが何休の基本的な立場であつた。ここに「守文持論」の「俗儒」ならざる通儒の立場がひらけるであらう。何休は「六經を精研して世儒及ぶ者なく」、孝經、論語はもとより、風角や六日七分など術數の書にいたるまで注を書き、「皆な典謨を經緯し、守文と説を同じくせず」とつたえられる（本傳）。『解詁』に即しつつ、これらのことをややちいって考察しよう。

何休が嚴、顔二家に代表されるいわゆる家法、師法といかに對立しているか、その一端はすでに「倍經」、「任意」、「反傳違戾」の實例についてみたとおりである。そのほかにも、たとえば許慎の『五經異義』によると、公羊説では易の「時乗六龍以馭天下也」や『王度記』にもとづいて天子の駕は六龍（馬）と説かれたが、しかるに何休は「禮に大夫以上、天子に至るまで皆な四馬に乗る。四方に通ずる所以なり」と説いて、公羊説と對立する。徐疏によれば、公羊説とは章句家の意である（隱公元年注、疏）。

かくのごとく何休は、いわゆる章句家の言と對立する場合がすくなくとみうけられる。かれはむしろより古き傳統にかえらんことを自分の主張とした。序の結びには、「往さきごろ略りやくぼ胡毋生の條例に依り、多おほくね其の正しきを得たり。故に遂に隱括し、繩墨に就かしむ」とのべられている。「春秋には改周受命の制有り。孔子は時を畏れ害を遠ざけ、又た秦の將まさに詩書を燔やかんとするを知り、其の説は口授相傳す。漢の公羊氏及び弟子の胡毋生等に至つて、乃ち始めて竹帛に記す」（隱公二年注）といっているように、胡毋生（子都）こそは孔子から口傳で相承されてきた春秋の義をはじめて竹帛に記録した人物、いわば公羊學の原點に位置する人物として意識されていたのであつた。何休の依據した胡毋生の條例がいかなるも

のであったか、残念ながらあきらかではない。一方、かの董仲舒の名を何休はなぜかあげないが、しかし董仲舒から何休への繼承関係もきわめて顯著なのである。たとえば顔安樂説とのくいちがいを示す何休の三世の區分はすでに董仲舒の説としてあったし、また逢丑父の權道によつて死を免れた齊の頃公を、もし「絶たざれば、是れ諸侯の戦いて難に死する能わざるを開くなり」と何休は評していたが、『春秋繁露』竹林篇のつぎの言葉にそのもとづくところをもとめてよいであろう。「大辱は南面の位を去つて束縛せられて虜と爲るより甚しきはなきなり。曹子曰わく、辱若し避く可くんばこれを避くるのみ。其の避く可からざるに及んでは、君子は死を視ること歸するが如し、と。頃公の如き者を謂うなり」。かかる董仲舒から何休への繼受をまことに丹念に追跡したのは蘇輿であつた。その『春秋繁露義證』卷首の例言にはいう。

何休は公羊解詁に序して云わく、往ころ略ぼ胡毋生の條例に依り、多ね其の正しきを得たり。故に遂に隱括し、繩墨に就かしむ、と。しかるに一語として董に及ぶなし。條例とは當に是れ五始・三科・九旨・七等・六輔・二類・七缺の説なるべし。其の義を究むるに此（繁露）と合する者、十にして實に八九。胡毋生は董と業を同じうす。殆んど師説同じからん。

そして蘇輿は陳澧の『東塾讀書記』（卷十）が、何注の繁露におなじきもの、わずか三條をあげるにとどまるのを遺憾としている。陳澧も「何注は多く春秋繁露に本づけるに、徐彦は之を疏明せず」といい、たとえば、として三條をあげるのだが、ちなみにその三條とは（一）隱公元年注「一を變じて元と爲す」が繁露重政篇「春秋は一を變じてこれを元と謂う」に、（二）隱公元年傳「所見異辭、所聞異辭、所傳聞異辭」の長文の注が俞序篇「始めには大惡殺君亡國を言い、終りには小過を赦す」と言う。是れ亦た蠅粗に始まり、精微に終る。教化流行し、德澤大いに洽ねく、天下の人、人ごとに士君子の行い有つて過少なし。亦た二名を議るの意なり」に、（三）これは注ではないが、隱公元年疏が引く春秋説、「元の深を以て天の端を正し、天の端を以て王者の政を正す」がそのまま二端篇に、それぞれもとづくことを指摘するのがそれである。いま蘇輿に導かれつつ得られたいくつかの繼受の關係を参考までに注に例示しておくが、そのほかに、たとえば詩大雅棫櫨の「奉

璋褱裝、髦士攸宜」の句を鄭箋は宗廟の祭の辭とするのにたいして、董（郊祭篇）何（定公八年注）いずれも郊天の辭とするなど、二人の一致した見解はすくなくない。かく、閑笑すべき後世の「説者」たちならざる董仲舒、あるいはまた胡毋生の古き傳統に回歸することが、何休の顯著な立場のひとつとしてあったことは疑いえないのである。

しかしさりとて、何休の説すべてが董仲舒、ないし胡毋生に淵源するわけではもとよりない。何休は春秋の經傳の義を疏通すべく、さまざまの經傳の涉獵につとめた。いわゆる「説者」たちを「他經を援引し、其の句讀を失う」と完膚なきまでに批判する何休が、實はしばしば他の經傳、とりわけもつとも仇敵視すべきはずの左傳をもつて注すること、つぎのごとく隨意その二、三の例を示すことができる有様なのである。

隱公三年「癸未、葬宋繆公、葬者曷爲或日、或不日、不及時而日、渴葬也」の注、「時に及ばずとは、五月に及ばざるなり。禮に天子は七月にして葬り、同軌畢とく至る。諸侯は五月にして葬り、同盟至る。大夫は三月にして葬り、同位至る。士は踰月にして外姻至る……」の禮は、左傳隱公元年にみえる。^⑤

文公八年「宋人殺其大夫司馬、宋司城來奔、司馬者何、司城者何、皆官舉也」の注、「皆な官名を以て擧げてこれを言う。天子に大司徒・大司馬・大司空有り、皆な三公の官名なり。諸侯に司徒・司馬・司空有り、皆な卿官なり」につづけて、「宋の司空を變じて司城と爲す者は、先君武公の名を辟くればなり」というのは左傳桓公六年による。

昭公十一年「夏四月丁巳、楚子虔誘蔡侯般、殺之于申、楚子虔何以名、絕、曷爲絕之、爲其誘封也」の注、「自ら知らずして死せしむ。故に誘を加う」は、左傳に「酔わせて之を執え、……之を殺す」とあるのからヒントをあたえられた解釋であろう。

かく左傳を一例としてさまざまの經傳を涉獵のうえ、なおかつ「文據」（襄公二年疏の語）の得られぬ場合、あるいはかならずしも「文據」を必要とせぬと判斷された場合、徐疏の表現をかりるならば、何休は「理の當に然るべき」（莊公十四年）ところを、ないしは「理を以て知った」（莊公二十八年、僖公二十八年）ところを、みずからの「消量」（宣公五年、定公元年）

にもとづきつつ「意を以て言う」（隠公三年）のである。かかる「意を以て言わ」れた注のなかに、何休の創造にかかる先人未發の説はすくなくないであろう。またたんに經傳の義を疏通するためにのみ附されたとは思えない注もけつしてすくなくないのだが、それらはとくに何休一人の言葉なのではないか。この點についてはのちにあらためて考察したい。董仲舒からの繼受は否定したいけれども、それとは反對に董仲舒と明白なくいちがいを示す説ももちろん存在している。たとえば、やはり蘇興によって指摘されていることだが、董仲舒が天子の臣を三公、大夫、下大夫、士、下士のおよそ五等としたのにたいして（爵國篇）、何休は「天子の上士は名氏を以て通じ、中士は官を以て録し、下士は略して人と稱す」（隠公元年注）と記すように、天子の士を士と下士の二等ではなく、上士、中士、下士の三等に分けるがごとくである。そして董仲舒説ともっとも顯著な乖異を示すのは、かの「張三世」の説にかんしてであるだろう。董仲舒は成公十五年傳、「春秋内其國而外諸夏、内諸夏而外夷狄、……言自近者始也」にもとづきつつ、「近きに親しみて以て遠きを來けしめ、未だ近きを先にせずして遠きを致す者あらざるなり。故に其の國を内にして諸夏を外にし、諸夏を内にして夷狄を外にす。近き者より始むるを言うなり」（王道篇）というにとどまっている。傳文からのめだつた飛躍はない。だが何休によれば、春秋は魯に天下の化首たる王者の立場を託して王法を示したものであり（隠公元年、成公二年注）、かつ所傳聞の世に衰亂し其の國を内にして諸夏を外にす、所聞の世に升平し諸夏を内にして夷狄を外にす、所見の世に太平し夷狄進んで爵に至り、天下の遠近小大、一の若し、なる圖式にふくらまされたのであった（隠公元年、昭公十六年注）。もっともそれは三世それぞれにたいして「辭を異にする」という「文」のうえでのことがらにすぎなかったのではあつたけれども。

四 何休と清流の思潮

『公羊解詁』には、春秋がはかならぬ漢王朝のために制作されたという信念、その神秘的色調を顧慮すれば信念といわんよりはむしろ信仰、が表明されている。哀公十四年春、西に狩して麟を獲た。「王者有れば則ち至り、王者無ければ則

ち至らざる」この仁獸の出現には、「周亡之徵」、「漢興之瑞」、「孔子將沒之徵」の三義がふくまれているという。「孔子將沒之徵」はひとまずおき、「天下散亂せる」春秋にあたつて「當に至るべからずして至った」がゆえに、周にとつては天
下亡失を示す「異」である麟の出現が、しかし一方では、聖漢まさに興らんとする「瑞」となるのである（注および徐疏）。
麟の出現を契機として、孔子が漢王朝の興起を豫見し、漢王朝のために春秋を制作したことを何休は哀公十四年傳の注に
くりかえしつぎのように説く。

傳「孔子曰、孰爲來哉、孰爲來哉、反袂拭面、涕沾袍。」「夫子素と圖録を案じ、庶聖劉季の當に周に代るべきを知る。

薪采者の獲麟するを見、其の爲に出するを知る。何となれば、麟なる者は木精、薪采なる者は庶人燃火の意。此れ赤帝將
に周に代りて其の位に居らんとす、故に麟、薪采者の執うる所と爲るなり。……夫子は其れ將に六國は爭彊して從橫相滅
の敗あり、秦と項は驅除して積骨流血の虐あつて然る后に劉氏乃ち帝たらんとするを知る。深く民の害に離ること甚だ久
しきを閔れみ、故に豫じめ泣くなり」。

傳「何以終乎哀十四年、曰備矣。」「人道浹ねく、王道備わる。必らず麟に止むる者は、撥亂の功の麟に成ること、猶お
堯舜の隆んなる、鳳凰來儀するがときを見さんと欲す。故に麟は周に於いては異たるも、春秋は記して以て瑞と爲す。
大平の瑞應を以て效と爲すを明らかにするなり。筆を春に絶ち、下の三時を書せざる者は、木絶ちて火は王んに、制作の
道備わり、當に漢に授くべきを起すなり」。

傳「君子曷爲爲春秋、撥亂世、反諸正、莫近諸春秋。」「……孔子仰いで天命を推し、俯して時變を察し、却いて未來を
觀、豫じめ無窮を解く。漢の當に大亂の后を繼ぐべきを知り、故に撥亂の法を作りて以てこれに授く」。

傳「制春秋之義、以俟後聖。」「聖漢の王を待ちて以て法を爲る」。

春秋が漢王朝のために制作されたというのは、先人未發の説ではない。ただし董仲舒はやはり「孔子は新王の道を立
つ」（玉杯篇）とか「春秋は魯に縁りて以て王義を言う」（奉本篇）とかいうのみで、新王を漢王朝と特定するまでにはいた

っていない。ともかく、春秋が漢王朝のために制作されたのだとすれば、それは漢人にとっていやがおうでも深切な意味をになうものとなるであろう。現實の要請とふかくかかわりをもつものとなるであろう。そのことは滾曙の『公羊問答』卷二、「問う、哀十四年注に、聖漢の王を待ちて以て法を爲ると。此れ漢儒の空言なるか、抑も果して確證ありや否や。曰わく、兩漢の君臣は皆な經義を以て發して文章と爲す。其の詔誥奏議を觀るに、凡そ決疑定策するには悉くこれを公羊に本づく」、につづいて引かれるあまたの舉例が示すごとくであり、そして何休の公羊注についても、公羊經傳と漢制とのあいだに脈絡をもとめようとする態度は顯著にみとめられる。訓詁的注釋において、たとえば哀公十二年、「春、用田賦」の注、「田賦を用うと言う者は、今の漢家、民錢を斂むるに田を以て率と爲すが若し」のごとく、「若今……」の表現が多用されるのは、古典注釋の常套的手法ではあるにしても、やはりその方向にあるものであるにはちがいない。さらに、漢禮や漢律がひきあいにだされるのはいっそうその方向にあるであろう。もちろんそれだけではない。中國人にとって、古典の注釋が訓詁的注釋に終始するだけではなく、自己の思想を託すべき有力な著述のひとつの形式であつたとするならば、かの世紀末的病症を示した何休の時代、すなわち後漢の桓靈時代の情況が何休注にポジティブにあるいはネガティブに反映されているとうけとつても、けつしてうがちすぎではないであろう。『解詁』の序には、春秋が「亂に據いて作られ」たとかたられてゐるが、かく春秋が亂世であつたように、何休の生きた時代もまた亂世であつた。「上に聖帝明王あり、天下太平にして然る後に乃ち至る」（哀公十四年注）ところの麟の出現は、「聖漢將に興らんとするの瑞」（同疏）であるべきはずであつた。だが、何休の周邊にはもはや太平とよぶべき情況はいささかも存しなかつた。たんに經傳の義を疏通するだけにおわらない注のなかに、亂世の春秋に託してかたられたとおぼしき何休の感懷をみいだすことは容易である。何休が黨人の一人であつたことをおもえば、それはひとり個人的感懷たるにとどまらず、清流士人の思潮としての普遍性をもつものであつたろう。

宣公十七年「冬十一月壬午、公弟叔肸卒」の注、「字を稱する者は、これを賢とするなり。宣公の篡立するや、叔肸は

其の朝に仕えず、其の祿を食まず、身を貧賤に終^おう。故に孔子曰わく、信を篤くして學を好み、死を守つて道を善くす、危邦には入らず、亂邦には居らず、天下に道あれば則ち見^あわれ、道なければ則ち隱る、とは此の謂なり。……卒といひ字いう者は、其の宜しく天子の上大夫たるべきを起すなり。孔子曰わく、滅國を興し、絶世を繼ぎ、逸民を擧ぐれば、天下の民は心を歸す、と。かくわざわざ『論語』泰伯、堯曰兩篇の言葉を引きのは、たんなる經の注釋としてはいささか思ひいれがすぎはしないだろうか。宦官の寵用をいましめたとおぼしき發言ももちろん存在する。襄公二十九年「闔弒吳子餘祭、闔者何、門人也、刑人也、……君子不近刑人、近刑人則輕死之道也」の注、「刑人は自らを頼まざるに而も用いて闔と作し、これに由つて出入し、卒に殺す所と爲る。故に以て戒と爲す。其の君と言わざる者は、公家は畜^{やしな}わず、士庶は友とせず、これを遠地に放ち、去かんと欲すれば之^ゆく所に聽^{まか}す（禮記王制）、故に國に繫けず。國に繫けざるが故に其の君と言わず」、は傳本文からそのまま導かれたものであるけれども、哀公四年「三月庚戌、盜弒蔡侯申、弒君賤者窮諸人（文公十六年傳）、此其稱盜以弒何、賤乎賤者也、賤乎賤者孰謂、謂罪人也」の注においてもまたつぎのように説く。「罪人なる者は未だ刑を加えざるなり。蔡侯は罪人を近づけ、卒に其の禍に逢う。故に以て人君の深戒と爲す。其の君と言わざる者は、方に當^{まさ}にこれを刑し放つべし。刑人と義同じ」。後漢の時代、「刑隸」（劉陶傳）とか「刑餘」（宦者傳論）とかいうのが宦官にあたえられた蔑稱であつた。あるいはまた楊秉の上疏に、「臣、國の舊典を案ずるに、宦豎の官は本と省闔に給使し、昏を司り夜を守るに在るも、今は猥りに過寵を受け、政を執り權を操る」（楊秉傳）と、あたかも「闔」を連想させる表現の見えること、さらにまた郎中の審忠が宦官曹節たちを彈劾した文章に、「吳は刑人を使い、身、其の禍に遭^あう」（宦者曹節傳）とみえるのは、いうまでもなく公羊襄公二十九年を襲用すること、などに注目しなければならぬであらう。

そして何休が「賢者」の選用力説するとき、ひろく清流士人のあいだに存在した論調にいよいよ接近してくるのである。「禮に公卿大夫士は皆な賢を選びてこれを用う。卿大夫は任重く職大なり、當^{まさ}に世々に爲すべからず。其の政を乗ること久しく、恩徳廣大なれば、小人これに居れば必らず君の威權を奪わん」（隱公三年注）。しかしながら賢人は用いられ

ずに「世卿」が國君の威權をうばい、あるいは「天子諸侯は賢を求むることに務めずして専ら親親を貴ぶ」（文公元年注）のが春秋の現實であつた。かくして何休はいう。「春秋の時に當りて選舉の務を廢し、不肖を位に置き、輒ちこれを退絶して以て過失を生ず。君臣忿爭出奔するに至りては、國家の昏亂する所以、社稷の危亡する所以なり」（隱公元年注）。君臣忿爭出奔の事實こそないけれども、濁流勢力の進出にともなう選舉制の壞亂、それが國家社稷の危機をもたらしめているのだとは、すでに第一節にあげた李固、朱穆、皇甫規、審忠など、清流士人に共通した認識であつた。

ところで『春秋』には、春秋の現實は亂世なるにもかかわらず、その措辭のなかに、衰亂の世から升平の世へ、升平の世から大平の世へ發展するといういささか樂觀的な史觀が託されていると何休は考えたのだが、かれはいわゆる大平の世の全體的な見取圖を、宣公十五年傳「什一者、天下之中正也、什一行而頌聲作矣」、の長文の注に提示している。もっともそのすべてが何休の發明にかかるわけではないけれども、それこそが何休によって假設された理想社會にはかならなかつた。「頌聲」とは「大平歌頌の聲、帝王の高致」であると何休は説く。

そこに描出された社會のなによりの特徴は、富と勞働の平均化（財均力平）ということであつて、それは井田法によつて實現される。井田法は野に寇盜なからしめ、強者が弱者をしのぐことなきように聖人が制したものであり、一夫一婦は百畝を受田して父母妻子を養ない、五口を一家とする（五口の枠外のは餘夫とよばれ、一人あたり二十五畝を受田する）。さらに公田が十畝。百畝の私田に十畝の公田、これがいわゆる什一の税である。廬舎は二畝半。したがって一家の土地は一頃十二畝半、八家で九頃、それだけが一井をなす。廬舎が中央におかれるのは人を貴び、公田がそれにつぐのは公を重んじ、私田が外におかれるのは私を賤しんのでことである。井田には、（一）地氣を泄らすなきこと（徐疏、冬前相助犁）、（二）一家に費なからしめること（田器相通）、（三）風俗を同じくすること（同耕而相習）、（四）巧拙を合すること（共治耒耜）、（五）財貨を通すること（井地相交、遂生恩義、貨財有無、可以相通）、つまり共同作業と相互扶助の内實がともなっている。また「市井」の語があるように、交易も井田において行われる。災害に備えるため、一種類の穀物だけをうえてはならぬ。ま

た五穀の成長を妨げる樹木が田中であつてはならぬ。廬舎のまわりには桑荻雜菜をうえ、五羽の牝鶏と二頭の牝豚をかい、瓜果を疆界のあぜにうえる。女子は蠶織にげむ。かくして老人は帛を着、肉を食らうことができ、死者は葬られることができる。また十井共同で兵車一乘を負擔する。司空は田の高下善惡を鑑別して三等に分け、上田は一歲一墾、中田は二歲一墾、下田は三歲一墾とする。肥饒の田と境塙の田の不公平をなくすため、三年ことの土地がえとそれにとまなう住居の移動を実施する。

さて、田にある聚落は廬、邑にあるのは里とよばれ、一里は八十戸、八家が一巷をとにし、里の中央に校室がおかれる。里を代表するのは父老と里正であつて、かれらは民の倍田を受田し、馬に乗ることをゆるされるが、父老には「耆老有徳者」、つまり経験ゆたかな故老中の有徳者が、里正には「辯護伉健者」、つまり實行力、指導力にすぐれた強健者が、それぞれ選ばれるのである。父老と里正は、民が田作にでかける春夏の夜あけがた、門を開いて塾（門側之堂）に坐し、おくれてやってきたものは出してやらす、日ぐれがた樵をもつて歸らぬものは入れてやらぬ。また收穫がおわつて民が城郭内で生活する秋冬、里正は紡織をはげまし、巷をおなじくする男（？）女は共同で夜なべ仕事に精をだす。だから女子勞働は一月で四十五日の勞働量に相當し、これは十月から正月までつづく。一方この間、父老は校室において教育にあたる。八歳になれば小學、十五歳になれば大學に學ぶが、その方法は、成績優秀者が里の校室から郷の郷學へ、郷學から邑の庠へ、庠から諸侯の國學へおくられて小學に學び、さらに諸侯は小學の成績優秀者を歲ごとに天子に貢して大學に學ばせるのであり、大學の成績優秀者は造士とよばれる。もし造士の徳行、能力ともにひとしいとき（行同而能偶）には、射によつて選別のうえ爵をあたえる。かくして「士は才能を以て進取し、君は考功を以て官を授ける」こととなるのだが、かかる原則は何休が力説してやまない「賢者」の選用そのものにはかならないであらう。そしてこの社會は、貢士の制にあきかなように、あくまで「財均力平」の里を基礎としており、里から郷、邑、國とつみかさねられ、そしてそのうえに天子が位置する。上意下達ならざる下意上達の構造を有するのであり、いわば民意の總和のうえに國家は成立する。そ

のことは、またつぎのようにも説かれていることによって證明されよう。すなわち、六十歳の男子、五十歳の女子にして子なきものには、官が衣食を給したうえ、かれらをして民間に詩を採集させる。「飢えたる者は其の食を歌い、勞しき者は其の事を歌う」ところの詩である。それらはやはり里から郷、郷から邑、邑から國、そして國から天子につたえられ、かくして王者は「關戸を出でずして盡く天下の苦しむ所を知り（老子四十七章をふまえる）、堂を下らずして四方を知る」とができる、と。

さて王者は「徳の元に合する者は皇と稱せられ」、「徳の天に合する者は帝と稱せられ」、「仁義に合する者は王と稱せられ」、あるいは「天の生む所なるが故にこれを天子と謂う」（成公八年注）などときまざまによばれるのだが、しからは王者たるもの、いかにあるべきなのか。何休はつぎのように考える。王者は「至廉無爲を以て天下に率先し」、求めるところがあつてはならぬ。求めるところがあるならば「諸侯は貪り、大夫は鄙しく、士庶は盜竊する」であらう（桓公十五年注）。

またそもそも「天地の生ずる所は一家の有に非ず、有無當に相い通すべく」（隱公元年注、「天地自然の利は人力の能く加うる所に非ず、故より當に百姓とこれを共にすべき」（桓公十六年注）ものなのだ。ここにはいみじくも『太平經』と名づけられたかの道經の思想と通いあうものが認められるのだが、かく天地自然がもたらしてくれる利を王者一家で獨占すべきでないとともに、かかる天地の徳にたいして報恩のところが示されねばならない。たとえば社の祭はその具體的表現としてある。「社なる者は土地の主なり、祭なる者は徳に報いるなり。萬物を生じ、人民を居らしめ、徳は至って厚く、功は至って大なり。故に春秋に感じてこれを祭る」（莊公二十三年注）。何休が宣公十五年注に描くところの理想社會も、やはりかかる天地自然のなかにふかく根をおろしているおもむきがある。そこでは『禮記』王制にいわれるように、三年の耕作で一年、九年の耕作で三年、三十年の耕作で十年の備蓄が生じ、水災旱害にも民には憂色なく、四海のうちすべてその業を樂しみ、かくして「頌聲が作る」のだ、とながい注を結んでゐる。

春秋時代には、國、屬、漣、卒、州からなる「保伍」の制の壞亂がすすんでいた、と何休はいう（桓公二年注）。それは

まぎれもない春秋の現實であつたのだが、あたかもそのように後漢代においても郷里制の秩序は確實に崩壊の方向にむかつていた。そして清流の運動の主要な側面が、川勝義雄氏のいわれるように、郷里制崩壊のよつてきたところを豪族の徳ならざる武力と財力による郷里支配——領主化傾向——にあると認識し、それについて抵抗したところに存したのだとするならば、理想の社會を財均力平の里を基礎とするものとしてえがき、またその頂點にたつところの王者を至廉無爲としてえがくとき、ここでも何休はかれら清流と立場を分ちあつてゐるのではないか。どこまでも衰亂にむかうという絶望が、かかる理想社會に逆投影されてゐるのではないか。

結　　び

『公羊解詁』には清流士人の思潮とひびきあう言説がすくなくないと感じられる。そのことは何休の現實との淺からざるかかわりあいを思わせる。だがそれはまた獲麟の解釋や衰亂・升平・太平の三世説に端的にみられるごとく、すぐれて觀念的、理念的な思考を特徴としてゐる。そこには現實と理念とが微妙に交錯しあう。ひとはだれしも現實を思考の出発點としなければならないが、しかしそれを理念の世界にとき放ち、飛翔させる自由を留保する。「王室は亂るるも肯て救うものなく、君臣の上下は壊敗し、亦た新たに夷狄の行ないあり」(昭公二十三年注)、「定公は政を失し、權は陪臣に移り、其の尊卿(季孫氏)を拘し、其の五玉を喪ない、以て信を天子に合し、質を諸侯に交すなく」(定公八年注)、「禮に民に税するに公田は什一を過ぎず、軍賦は十井に一乘を過ぎざるに、哀公は外、疆吳を慕い、國儲を空盡す、故に田賦を用いて什一を過ぎたり」(哀公十二年注)。かくのごときがほかならぬ春秋末の嚴肅な現實であつたにもかかわらず、何休は「春秋は定哀の間、文もて太平を致し、王者の治定まるを見さんと欲す」(定公六年注)と、『春秋』が「文」のなかに、微妙な措辭のなかに、(昭)定哀の世が太平の世であることを示してゐると考えた。それは何休がかかわりあつた後漢末の現實がはてしもない衰亂へと歩をすすめていたにもかかわらず、かの「什一行而頌聲作矣」の注に集中的表現をみるような

太平の理想社會を理念の世界に構築したのと軌を一にしている。現實にたいする絶望のふかさに逆比例して太平の希求が増幅されたのであったろうか。ともかく、昭定哀三代があくまで「文」として太平の世でありえたように、それもなくで實ならざる「文」として、つまり理念の世界にのみ存在可能な社會であつた。そこには第二節に考察したところの讀書と生産労働とが一體化した地方學團の理想がながし投影されているのかも知れないが、何休とてそのまっただけ實現の條件の存せざることを熟知していたであらう。陳蕃傳に「后の父なる大將軍竇武と心を同^あわせ力を盡くし、名賢を徵用して共に政事に參ぜしむ。天下の士、頸を延ばして太平を想望せざるはなし」とあるように、かつて何休が陳蕃の辟召に應じたのもあつた太平への期待の情にうごかされてのことであつたかと想像されるが、その陳蕃はなく、清流の運動は挫折し、何休みずからも禁錮によって塾居を餘儀なくさせられていたときに『公羊解詁』は執筆されたのであつた。

何休と現實とのかわりあいはいけつして淺くはなかつた。だがたとい注釋が自己の思想をかたるひとつの著述の形式ではあるにしても、注釋はやはり注釋である。『公羊解詁』は、經傳を媒介とすることによって、自己と現實との直截的な關係を抽象化し、あるいは理念として結晶化しえたのであり、そこに清流士人たちの經世策的議論とを分ける獨自の立場が成立する。それはすぐれて知的な一なりである。その知的な一なりをゆたかにするために、太學を支配していた家法、師法とあきらかに對立する方法、すなわちあまたの經傳を涉獵し、またふるき傳統に回歸することが有效な方法であるとして採用されたのであつた。

註

- ① 趙岐のことは、拙文「魂氣の如きはゆかざるなし」(『展望』一九七六年六月)において軽くふれた。

- ② ただし『水經注』卷一六穀水によると、石經の東に存する順帝の陽嘉元年立の一碑には「建武二十七年造太學……」と刻まれている。なお、博士官は建武五年にさきだつて設けられてい

たこと、建武四年の范升の上疏に「今陛下草創天下紀綱未定、雖設學官、無有弟子」とあり、また儒林傳序も「先是四方學士、多懷挾圖書、遁逃林藪、自是莫不抱負墳策、雲會京師、范升陳元鄭興杜林衛宏劉昆桓榮之徒、繼踵而集、於是立五經博士、各以家法教授」とのべたあとに、「建武五年、迺修起太學」と記

しているとおりである。

③ もっとも太學創設前年の建武四年のことである。范升傳と陳元傳とにみえることからの経緯は、狩野直喜『兩漢學術考』(一九六四年 東京 筑摩書房) 一三五頁以下に詳しい。

④ 時代はくだるが、廣陵の臧洪も父の戰功により十五歳にして童子郎を拜命し、太學に名を知られたという。

⑤ ただし儒林傳序によれば、かれらはつねに太學に在籍したわけではなく、郷射禮を習う春三月と秋九月にのみ太學に會した。

⑥ 楊秉傳「秉上言、三署見郎七百餘人……」。陳蕃傳「蕃上疏駁之曰、……又三署郎吏二千餘人……」。和帝紀元興元年注に引く『漢官儀』によれば、三署とは五官署と左署、右署である。

⑦ 太學生は寄宿舎生活をおくっていたらしい。順帝のときに新築された二百四十房、千八百五十室はおそらくそのための施設であろう。

⑧ 『漢書』卷八九循吏文翁傳につきの記事がある。「景帝末、爲蜀郡主、……又修起學官於成都市中、招下縣子弟、以爲學官弟子、爲除更繇、高者以補郡縣吏、次爲孝悌力田、常選舉官童子、使在便坐受事、每出行縣、益從學官諸生明經飭行者與俱、使傳教令、出入閭閻、縣邑吏民、見而榮之、數年爭欲爲學官弟子、富人至出錢以求之、繇是大化、蜀地學於京師者、比齊魯焉、至武帝時、乃令天下郡國、皆立學校官、自文翁爲之始云」。なお鍾皓は「以詩律教授、門徒千餘人」とつたえられる清流派の處士であつて、荀淑とともに潁川の士大夫の尊敬をあつめた。小吏に甘んじていた陳寔(潁川許の人)を發見し、その推輓につ

とめたのもかれである。

⑨ 時代はややくだるが、初平元年(一九〇)以後、荊州刺史劉表のもとにさかえた「荊州の學」にその典型をみいだす。詳細は加賀榮治『中國古典解釋史・魏晉篇』(一九五四年 東京 勁草書房) 五九頁以下を見よ。

⑩ たといえば五五頁にあげた張奐。

⑪ 『蜀志』劉焉傳注引益部耆舊傳「董扶、字茂安、少從師學、兼通數經、善歐陽尙書、又事聘士楊厚、究極圖籍、遂至京師、游覽太學、還家講授、子弟自遠而來」。同秦宓傳注引益部耆舊傳「任安、廣漢人、少事聘士楊厚、究極圖籍、游覽京師、還家講授、與董扶俱以學行齊聲」。

⑫ 鄭玄が太學に學んだあと、さらに東郡の張恭祖、扶風の馬融など、十餘年におよぶ各地の遊學をおえて故郷の北海高密にもどり、あるいは東萊に客耕しつつ數百人から千人にのぼる學徒をしたがえることとなるのは、四十歳をすぎて以後のこと、すなわちはやくとも第一次黨錮がおこった延熹九年(一六六)以後のことであり(鄭珍の『鄭學錄』卷一傳注は永康元年、一七〇、とする)、まもなく孫嵩、つまり孫嵩たちと黨錮に連坐している。かくして鄭玄は「隠れて經業を修め、門を杜ざして出でざる」生活に入るのだが、その間にあつても、研究はもとよりのこと、弟子の教育にも餘念がなかった。鄭原が孫嵩をおとすれたのは、さまざまの情況から判斷して、とりわけ後述のごとく汝南において范滂と交わったというその范滂の事蹟から推して(註⑭参照)、第一次黨錮と第二次黨錮の間のことと思われる。

⑬ 『魏志』管寧傳「管寧、字幼安、北海朱虛人也、……與平原華歆同縣郡原相友、俱游學於異國、並敬善陳仲弓(寔)」。また同華歆傳注引魏略(華)歆與北海郡原管寧俱游學、三人相善、時人號三人爲一龍、歆爲龍頭、原爲龍腹、寧爲龍尾」。

⑭ 韓卓は陳留太守として馮岱が着任すると、同郡の符融から主簿に推薦されたことのある人物である(符融傳)。そのほかの事蹟としては、符融傳注引袁山松書に「卓字子助、臘日奴竊食祭其先、卓義其心、即日免之」とあること、中平二年(一八五)當時に大將軍掾であったこと(應劭傳)を知のみ。陳寔は太丘長であったとき黨錮にあり、荆山に隱居して遠近の宗師するところとなった(『魏志』陳群傳注引魏書)。范滂は第一次黨錮にあたって黃門北寺獄に繫縛されるが、のち赦されて故郷の汝南征羌にもどる。しかし第二次黨錮にあたってすすんで縛につき、三十三歳のわかさをもって刑死した(黨錮范滂傳)。また祁原が涿郡に盧植をおとすれたのは、盧植が馬融のもとの學をおえて郷里にもどり、「門を闔ざして教授」していたときのことであろう(盧植傳)。

⑮ たとえば鄭玄が馬融に師事したときのことを、鄭玄傳につきのごとくいう。「馬融門徒四百餘人、升堂進者五十餘生、融素驕貴、玄在門下、三年不得見、迺使高業弟子、傳受於玄」。なかでも馬融の「門人冠首」であったのは盧植であり(『世說新語』文學篇注引鄭玄別傳)、鄭玄が馬融門下に入つたのもそもその紹介による。塾頭のごときものであろう。

⑯ 『世說新語』德行篇にのせる管寧と華歆にかんするつぎの話柄は、かれらの遊學中の情景ではあるまいか。「管寧華歆共園

中鋤菜、見地有片金、管揮鋤、與瓦石不異、華捉而擲去之、又管同席讀書、有乘軒冕過門者、寧諒如故、歆廢書出看、寧割席分坐曰、子非吾友也」。註⑬を参照。

⑰ 『魏志』崔琰傳につきのごとくいう。「至年二十九、乃結公孫力等、就鄭玄受學、學未暮、徐州黃巾賊攻破北海、玄與門人到不其山避難、時穀糴縣乏、玄罷謝諸生、琰既受遣、而寇盜充斥、西道不通、於是周旋青徐兗豫之郊……」。

⑱ 鄭玄を尊敬した北海國相孔融が、高密縣に命じてとくに一鄉をたてさせ、鄭公郷と名づけたことを想起せよ。また『後漢紀』卷二五靈帝紀中和五年、李膺の條にいう。「膺字公超、河南人、以至孝稱、棲遲山澤、學無不貫、徵聘皆不就、除平陵令、視事三日、復棄官隱居、學者隨之、所在成市、華陰南士、遂有公超市。ただし『後漢書』に記す張綱の子、張楷、字公超の事蹟との混同があるらしい。

⑲ 『藝文類聚』卷二三「自汝行之後、恨恨不樂、何者、我實老矣、所持汝等也、皆不在目前、意遑遑也、人之居世、忽去便過、日月可愛也、故禹不愛尺璧而愛寸陰、時過不可還、若年大不可少也、欲汝早之、未必讀書、并學作人、《太平御覽》卷四五九引の文章から、數句がこのあとにつづくものとして挿入する。汝今隴郡縣、越山河、離兄弟、去目下者、欲令見舉動之宜、觀高人遠節、(また『御覽』からつぎの一句挿入。聞一得三)、志在善人、左右不可不慎、善否之要、在此際也、行止與人、務在饒之、言思乃出、行詳乃動、皆用情實、道理違斯敗矣、父欲令子善、唯不能殺身、其餘無惜也」。

⑳ 錢大昕『廿二史考異』卷一二の說。中嶋隆藏「何休の思想」

『集刊東洋學』一九號を参照。

- ②① 何休の師とされる羊弼のことは不詳。李育は儒林傳に列傳されている。「李育、字元春、扶風漆人也、少習公羊春秋、沈思專精、博覽書傳、知名太學、……常避地教授、門徒數百、頗涉獵古學、嘗讀左氏傳、雖樂文宋、然謂不得聖人深意、以爲前世陳元范升之徒、更相非折、而多引圖讖、不據理體（註③参照）、於是作難左氏義四十一事、……後拜博士（建初）四年（七九）、詔與諸儒論五經於白虎觀、育以公羊義難賈逵、往返皆有理證、最爲通儒……」。さて陳立の『白虎通疏證』卷一爵篇は、「春秋傳（桓公十一年）曰、合伯子男爲一爵」について引かれる或説、「或曰、合從子、貴中也」について、李育と何休の關係を推測してつぎのようにいう。「公羊先師異説也、白虎通難論經傳、多以前一説爲主、或曰、皆廣異聞也、何休公羊注（桓公十一年）曰、合伯子男爲一、詞無所貶、皆從子、夷狄進爵爲子是也、合三從子者、制由中也、則何意以伯子男合爲一、皆稱子也、考休受學于羊弼、本傳云、休與弼追論李育意、……然則此蓋李育説也、李育之義、未知爲嚴氏春秋顏氏春秋、然休序以二家并非、又云依胡毋子都條例、則李育之説、亦本之胡毋子都也。何休の序はすぐあとに考察する。
- ②② 『解詁』序の徐疏に、三書の成立を注傳の前にありとする。
- ②③ 『春秋繁露義證』五行順逆篇。
- ②④ 先述のように何休の師が博士羊弼であつたこと、昭公二十五年「以人爲畜」の注に「畜、周埒垣也、所以分別内外衛威儀、今大學辟雍作側字」ということ、つまり熹平石經との異同を記すことのはかは不明。

②⑤ として第一節、五六頁にあげた建初八年の詔となる。

②⑥ 徐疏はこの「先師」を戴宏等とし、「今戴宏作解疑論而難左氏、不得左氏之理、不能以正義決之」という。陳立の「公羊義疏」は、何休が李育にもあきたらざる點があつたかと疑う。

②⑦ 「公羊義疏」は、漢石經との比較から何休が顔氏春秋に據つたとする惠棟『九經古義』公羊上の説をしりぞけて、「按何氏亦不必爲顏氏學、其本或偶與石經所記顏氏說合耳」という。さらに王國維は「書春秋公羊傳解詁後」（『觀堂集林』卷四）において重要な指摘を行つている。「邵公之本、實兼採嚴顏二家、與康成注禮經論語體例略同、知後漢之季、雖今文學家亦尙兼綜、而先漢專己守殘之風一變、家法亦不可問矣」。

②⑧ あるいは嚴、顏の二家が董仲舒に直接の系譜を有するためであつたかと想像される。『解詁』序の徐疏が引く鄭玄の「六藝論」に、公羊の傳授をつぎのように記す。「治公羊者、胡毋生董仲舒、董仲舒弟子嬴公、嬴公弟子珪孟、珪孟弟子莊（嚴）彭祖及顏安樂、安樂弟子陰（冷？）豐劉向王彥」。それにひきかえ胡毋生については、「漢書」儒林傳に「齊之言春秋者、宗事之、公孫弘亦頗受焉」とあるが、弟子のことはみえぬ。

②⑨ 「春秋繁露」楚莊王篇「春秋分十二世以爲三等、有見、有聞、有傳聞、有見三世、有聞四世、有傳聞五世、故哀定昭、君子之所見也、襄成文宣、君子之所聞也、僖閔莊桓隱、君子之所傳聞也」。

③⑩ 楚莊王篇「今所謂新王必改制者、非改其道、非變其理、受命於天、易姓更王、非繼前王而王也、若一因前制、修故業、而無有所改、是與繼前王而王者無以別」。——隱公元年「曷爲先言

王而後言正月、王正月也」注「王者受命、必徙居處、改正朔、易服色、殊徽號、變犧牲、異器械、明受之於天、不受之於人」。

楚莊王篇「是故作樂者、必反天下之所始樂於己以爲本、舜時、民樂其昭晬之業也、故韶、韶者昭也、禹之時(民樂其三聖相繼、故夏、夏者大也、湯之時、民樂其救之於患害也、故護、護者救也、文王之時、民樂其與師征伐也、故武、武者伐也、四者天下同樂之一也、其所同樂之端、不可一也)」。——隱公五年「僭諸公猶可言也、僭天子不可言也」注「王者治定制禮、功成作樂、未制作之時、取先王之禮樂宜於今者用之、堯曰大章、舜曰蕭韶、夏曰大夏、殷曰大護、周曰大武、各取其時民所樂者名之、堯時、民樂其道章明也、舜時、民樂其脩紹堯道也、夏時、民樂大其三聖相承也、殷時、民樂大其護己也、周時、民樂其伐討也、蓋異號而同意、異歌而同歸」。

玉英篇「桓之志無王、故不書王」。——桓公三年「春正月、公會齊侯于贏」注「無王者、以見桓公無王而行也、二年有王者見始也、十年有王者、數之終也、十八年有王者、桓公之終也、明終始有王、桓公無之爾、不就元年見始者、未無王也」。精華篇「是故魯嚴社而不爲不敬靈、出天王而不爲不尊上、辭父之命而不爲不承親、絕母之屬而不爲不孝慈、義矣夫」。——莊公元年「不與念母也」注「念母則忘父、背本之道也、故絕文姜不爲不孝、距蒯聩不爲不順、魯靈社不爲不敬、蓋重本尊統、使尊行於卑、上行於下」。

五行對篇「地出雲爲雨、起氣爲風、風雨者地之所爲、地不敢有其功名、必上之於天、若從天下者、故命曰天風天雨也、莫曰地風地雨也、勤勞在地、名一歸於天、非至有義、其孰能行此、

故下事上、如地事天、可謂大忠矣」。——莊公二十五年「秋、大水、故用牲于社于門、其言于社于門何、于社禮也、于門非禮也」注「大水與日食同禮者、水亦土地所爲、雲貫出于地、而施于上乃雨、歸功於天、猶臣歸美于君」。

③『公羊義疏』は『白虎通』崩薨篇および『說苑』修文篇にも同様の文があるのを指摘したうえ、「劉向班固何君、皆不習左氏、恐古禮有是語、故依用焉」と説くが、何休が左氏に習わずというのは多くの反證があつて賛成できない。なほ何休がここでは「士踰月、外姻至」といひながら、『左傳』隱公元年疏に引かれた「胥育」では、『禮記』王制にもとづいて、「禮士三月葬、今云踰月、左氏爲短」といふのはあきらかに矛盾である。陳立は「或胥育書成在先、作注時未及更正與」(『公羊義疏』)と推測する。注②を参照。

④稻葉一郎「春秋公羊學の歴史哲學——何休『春秋公羊經傳解詁』の立場——」(『史林』五〇卷三號)、日原利國「春秋公羊傳の研究」(一九七六年 東京 創文社)二五〇頁を参照。

⑤『禮記』禮運疏に引かれた『五經異義』にも、公羊説として「哀十四年獲麟、此受命之瑞、周亡失天下之異」とある。

⑥『春秋經傳集解』序の疏は、何休本ならざる孔衍元公羊傳本では、「十有四年春、西狩獲麟、何以書、記異也、今麟非常之獸、其爲非常之獸奈何、有王者則至、無王者則不至、然則孰爲而至、爲孔子之作春秋」と、傳文そのものに異同があることを指摘している。

⑦緯書の類は別として、たとえば『後漢書』公孫述傳「述亦好爲符命鬼神瑞應之事、妄引讖記、以爲孔子作春秋、爲赤制、而

斷十二公、明漢至平帝十二代、歷數盡也」、鄧惲傳「上書王莽曰、……漢歷久長、孔爲赤制」、蘇竟傳「夫孔丘祕經、爲漢赤制、玄包幽室、文隱事明」、霍諝傳「奏記於(梁)商曰、……謂聞春秋之義、原情定過、赦事誅意、故許止雖糾君而不罪、趙盾以縱賊而見書、此仲尼所以垂王法、漢世所宜遵前修也」、《論衡》須頌篇「春秋爲漢制法、論衡爲漢平說」、佚文篇「孔子曰、文王既歿、文不在茲乎、文王之文傳在孔子、孔子爲漢制文、傳在漢也」、正說篇「或說春秋二百四十二年者、上壽九十、中壽八十、下壽七十、孔子據中壽三世而作、三八二十四、故二百四十年也、又說爲赤制之中數也」、《隸釋》卷一孔廟置守廟百石碑「孔子大聖、則象乾坤、爲漢制作」、韓敕造孔廟禮器碑「孔子近聖、爲漢定道」、等々。

③⑥ かりに一例づつ示すならば、桓公十六年注に、「天子有疾極不豫、諸侯稱負茲、大夫稱犬馬、士稱負薪」というのは漢禮の名であると徐疏は指摘する。また昭公三十一年注「……猶律一人有數罪、以重者論之、春秋減不言入(莊公十年傳)是也」、本傳によれば、何休には春秋をもつて漢事を駁した六百餘條からなる著述があり、公羊の本意を妙得するものと稱された。

③⑦ 前掲中嶋氏論文はいう。「何休の公羊解詁作成の意圖は積極的であり、公羊の注釋の中に自身の經世策をうちたて、その世界觀を隱微なる形で表現しようとしたのである」。經世策なる表現にいささかのとまどいを感ずるが、基本的に賛成である。本稿では、清流運動における主要な思潮と考えられるものとの関連にもつぱら注目する。

③⑧ 『周禮』春官序官闋人の注に、「闋人司昏晨以啓閉者」とあ

る。

③⑨ 稻葉氏前掲論文は、「衰亂・升平世は各太平世が出現する度に、その過程に於いて經過する時期」と解し、何休の史觀は發展史觀ではなく循環史觀であると説く。しかしそれでは、のちに言及するところの定公六年注「春秋定哀之間、文致太平、欲見王者治定(疏、云春秋定哀之間、文致太平者、實不太平、但作太平文而已、故曰文致太平也)」の意味をどのように理解すればよいのだろうか。

④① いちいち注記しないが、とりわけ『漢書』食貨志との一致は顯著である。

④② このあたり、「後漢書」循吏劉寵傳注に引かれる春秋井田記の文章と一致する。

④③ 阮元の校勘記にいう。「按辯當作辨、辨即今人所用之辦字、辨護謂能幹辨護衛也」。『公羊問答』卷二にはつぎのようになっている。「詩疏中候握河紀說帝堯受河圖之禮云、稷辯護、注云、辯護供時用、相禮儀、是監典謂之護也」。

④④ 『白虎通』號篇にもいう。「帝王者何、號也、號者功之表也、所以表功明德、號令臣下也、德合天地者稱帝、仁義合者稱王、別優劣也、……帝者天號、王者五行之稱也、皇者何謂也、亦號也、皇君也、美也、大也、天人之總、美大之稱也、……」。

④⑤ 『太平經合校』(一九六〇年 北京 中華書局) 卷六七「或有遇得善富地、并得天地中和之財、積之適億億萬種、珍物金銀億萬、反封藏逃匿於幽室、令皆腐塗、見人窮困往求、罵詈不予、既予不即許、必求取增倍也、而或但一增、或四五適止、賜予富人、絕去貧子、令使其飢寒而死、不以道理、反就笑之、與

天爲怨、與地爲咎、與人爲大仇、百神憎之、所以然者、此財物
 過天地中和所有、以共養人也、此家但遇得其聚處、比若倉中之
 鼠、常獨足食、此大倉之粟、本非獨鼠有也、少內之錢財、本非

獨以給一人也、其有不足者、悉當從其取也……」。

④ 川勝義雄「漢末のレジスタンス運動」(『東洋史研究』二五卷
 四號)。

The Repression of Cliques 黨錮 and Scholarship

—With Special Reference to the Case of Ho Hsiu 何休—

Tadao Yoshikawa

Soon after the ch'ing-liu 清流 movement arose in various areas of China in the middle of the 2nd century A. D., Imperial University students in Loyang 洛陽 called out in the hope that scholarship would radically improve. Their expectations reveal the scholarly stagnation at the Imperial University at that time. The ch'ing-liu movement was frustrated on two occasions by repression, and it dissolved at the Imperial University where it had had strong connections. And yet, scholarship did improve to a level commensurate with those hopes. We have testimony to this in both the fact that in various local areas private academies flourished far beyond their earlier performances and that numerous writings were left by ch'ing-liu scholars and partisans. Ho Hsiu (A. D. 129-182) was one of those partisans. The method he employed in his work *Ch'un-ch'iu kung-yang ching-chuan chieh-ku* 春秋公羊經傳解詁 was to go back to the older tradition of Hu-wu Tzu-tu 胡毋子都 and Tung Chung-shu 董仲舒 and in addition to the *Kung-yang Commentary* get a firm grip on the principles of the classics and commentaries, especially the *Tso-chuan* 左傳. This was in opposition to the scholarly methodology known as *chia-fa* 家法 or *shih-fa* 師法 which was predominant at the Imperial University. Thus although written in the form of a commentary on the classics, the *Kung-yang chieh-ku* reflects the views of ch'ing-liu scholars to a remarkable extent.